

画集出版に寄せて 田中三友

十年前に一冊目の画集を出し、今度で二度目である。出版記念展も終わり今、やっとひと息である。記念展には新日美の皆さんにはあかね画廊までお越しいただき有難うございました。会報の紙面を借りお礼申し上げます。

御蔭さまで出版の方も思いの外好評を頂き、二冊目も出してよかったのかなと安堵しています。さて先日会報担当の小高氏より記事の依頼を頂く、有難いが書くことがない仕方なくつまらない文章で出版後記として昔の話を書くことにする。

新日美の会は私の勤務先に入入りしていた堀宗照氏の紹介で出品したのが始まりです。堀氏は今は国画会会員として活躍している。入会して二十数年、田中三友の名前で出てきたが、「三友」を「みつとも」と呼ぶ人が多く「さんゆう」と呼ぶ人は少なかった。

母方の先祖に日本画の絵師がいた。雅号を飯島三友という、その事は画集に小さく記したが、絵描きの曾祖父の事にも少しふれてみたい。三友は信州の山中江戸後期千八百二十一年に生まれる。浅間山と八ヶ岳の間に千曲川が流れる、その川の上流にある望月というところである。十六歳で信州を後に碓氷峠を馬に乗って、絵描きになるため江戸に向かって修業の旅に出る。少年三友は、渡辺崋山の高弟椿椿山の弟子となり、約十年修業。三友の雅号で信州に戻り、藩のお抱え絵師として八十八歳の生涯を終る。今も母の実家には江戸修業中に描いた粉本がものすごい量として残っている。

母の兄にあたる伯父はよく三友の絵の鑑定を頼まれると子供の私を連れてでかけた。母の実家は伯父の家と歩いて一時間もかからないところでよく遊びに行った。伯父にはよく絵を見せてもらい又三友の話も聞かされた。まだ日本画の見方も分からない頃、大小様々の線や色の鮮やかさは心に残っている。中学の頃粉本を押し入れの中から持出し、ねだつて数冊持ち帰った。今でもその百年前の絵は素晴らしく、美しく感動する。

高校も卒業近い頃職も決まらずどうしようかという時母親に話してみた。絵描きにもなるうかな「それを聞いた母は言下に絵描きにはなるな」の一言だった。その話はそれで終わった。



絵描きの三友はまっすぐ一本道、家の田畑はもちろん財産のすべてを失くしても絵を描き通した。その後子供・孫と苦勞して財産のすべてを買い戻したと母が話してくれた。

話は飛ぶがあの葛飾北斎は望月の中仙道から北国街道と歩いて小布施に向かっているのを三友は知っていただろうか？小布施には豪農が沢山おりスポンサーを頼ったのである。

昭和生まれの三友は四十年のサラリーマン人生を終わり、今はのんびり水彩画を楽しんでいる。画集など二冊も出し道楽とでもいうのだろうか、飯島三友の子孫はわたしの孫で五代目である。私の二代は無理だが、五代目あたりは、画集を見て絵を描くような変わり者ではないだろうか、三友今年古希！先祖は八十八歳まで生きた。後二十年はよし、生きてやる！

初めての個展で

大井治余

絵を描いて二十年以上になる。「いい趣味ね」と、友達に言われるが、もはや道楽というべきだと思っている。作品の数も年々増え続け収納に困っている。納得のいかない作品は潰しているのだが、没にするのには余りにも忍びないものもある。それらを集めると四十点以上ある。そこで個展を開いてみようと思いついたのが本音である。

このご時世、絵を買う余裕のある人がそんなにいるとも思えない。

次に困ったのは誇るべき画歴なるものが何にもない。そこで、号いくらという価格設定はやめることにした。買う人の立場に立つてインテリアとしてリーズナブルな価格にしようと考えた。たとえ一万円でも五万円でもお金を出して買ってくれるからには気に入って飾ってくれるに違いない。家の押し入れにいらるよりは作品も幸せというものだろう。

一点も売れないことを前提に計画したのだから気が楽だった。大井治余油彩画展と堂々と交通会館のパールルームに手づくりの看板を出した。

大井治余「誰れ？」と訪ねて入ってきた人もいた。アルバイトに雇った姪は絵画の世界など知る訳もない。私の叔母です」と答えていた。梯子を外されたような感じで入ってきたことだろうと思うが、ネームバリューがない分純粹に絵として見てくれたのではないかと思っている。

「これ下さい」という声が出て振り向くと男の人が数万円を手にして薔薇の絵を指差している。後でお送りします」と答えたが数日後に海外に行くとのこと。慌てて箱を探して紐で結わくと、すぐ近所だからそれでいい」と署名もせず去って行った。

その人が通りがかりに買ってくれた最初のお客さんだった。広告会社の社長さんもふらりと入って来てP110の絵を予約して、翌日社員が支払いに来てくれた。

長年会えなかった友人たちにも会え、又いろいろな人たちと会話が出来る幸せだった・・・と思っている。売れた絵の分又描くことが出来る。

私自身からすればこの個展は、凡人であるが故の苦闘展であり、区読点でありたいと思っている。

